

—第558次

本調査は、住宅建設にともなう事前調査である。調査地は法華寺の北方、左京一条二坊九坪にあたる(図236)。調査は、南北2カ所でおこなった。調査面積は、南区12㎡、北区13㎡の計25㎡。調査期間は、2015年8月24日から9月7日までである。

表土、埴輪片を含む黄褐色～褐色粘質土の整地土（奈良時代か）、地山（黄灰色粘質土）と続く。整地土上面の標高は、南区で73.2m、北区で73.0m。地山の標高は南区で72.7m、北区北端で72.6m、遺構面、地山ともに北に向かって緩やかに標高を下げる。

北区北方の約3mの範囲に、大小含めて少なくとも6基の土坑を検出した(図237左)。すべての遺構で奈良時代の遺物を含む。土坑群は北にさらに広がる。以下、主な土坑について述べる。

土坑SK10945 南北1.5m以上、東西1.0m以上、深さ約50cmの円形の土坑。土器が多く出土した。

土坑SK10946 南北1.2m、東西1.3m以上、深さ5~10

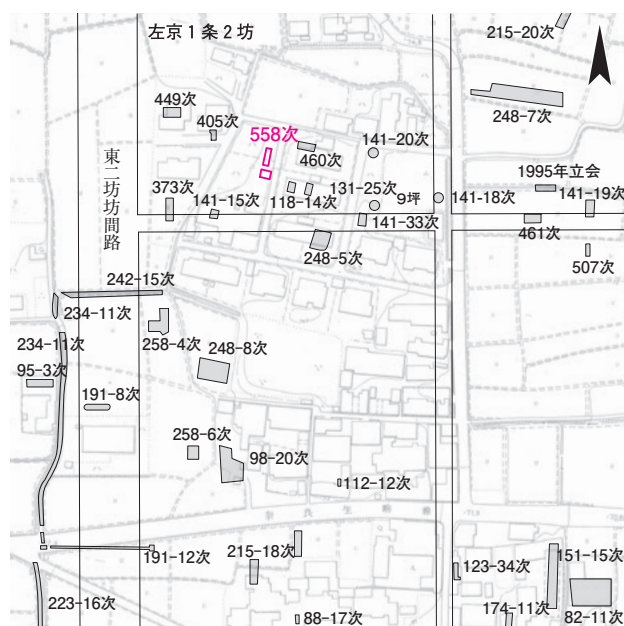
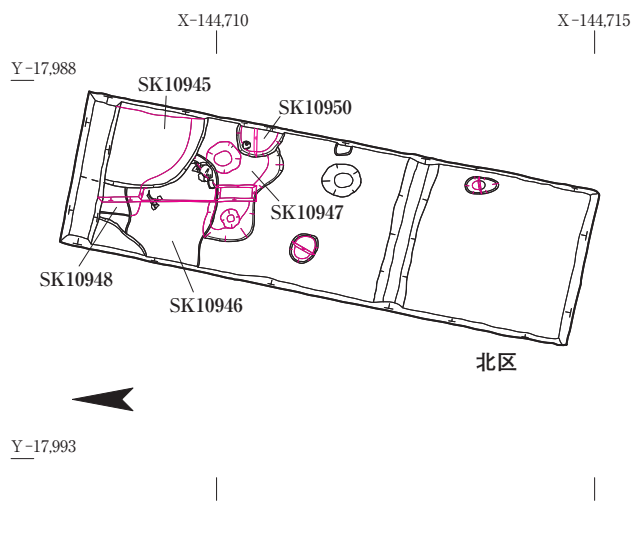


図236 第558次調査区位置図 1:3000

cmの不整円形の土坑。土器溜状。土師器、須恵器の甕が
多量に出土した。SK10945に壊される。

土坑SK10947 南北1.0m以上、東西1.3m以上、深さ約20cmの不整形の土坑。おもに土師器、須恵器が出土した。SK10945・10946、小土坑SK10950に壊される。

土坑SK10948 南北0.3m以上、東西0.4m以上、深さ約50cmの方形の土坑と考えられる。SK10945・10946に壊される。

小土坑SK10950 須恵器の小型平瓶（ほぼ完形）が正位の状態で出土した（図237右）。地鎮に関わる遺構の可能性はある。SK10947を壊す。（芝康次郎）

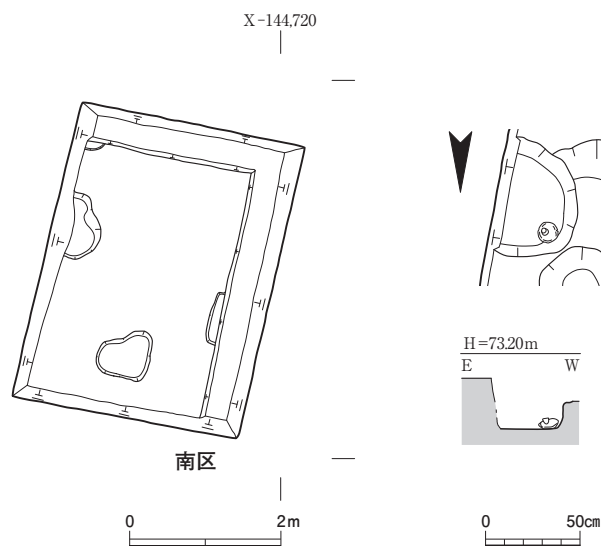


図237 第558次調査区遺構平面図1:100(左)・SK10950拡大図1:40(右)

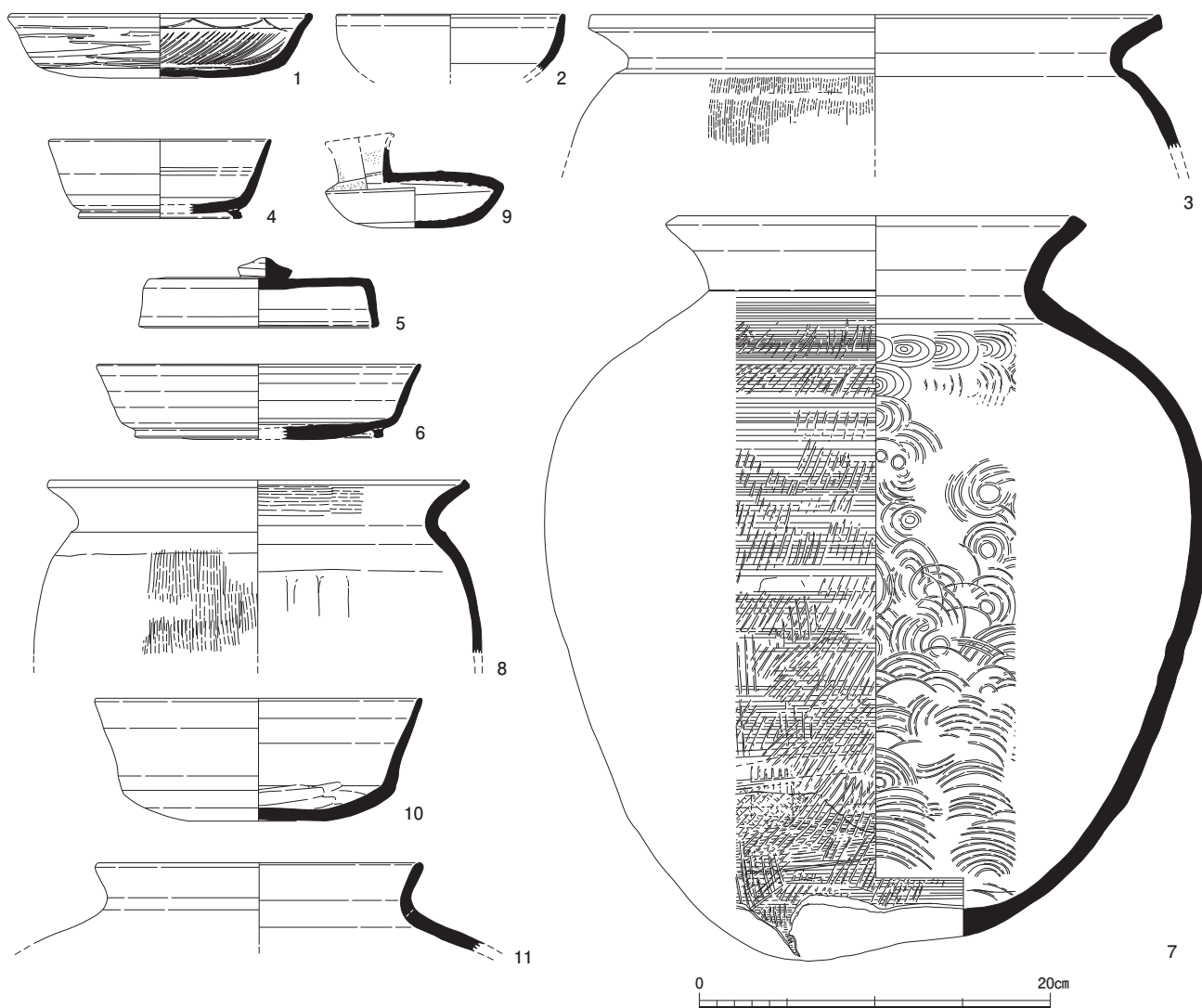


図238 第558次調査出土土器 1 : 4

4 出土土器

整理用コンテナ3箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代の須恵器・土師器を中心とし、一部埴輪片や近世陶器を含む。図238の1～4はSK10945出土。土師器杯A（1）は内面に一段放射暗文と連弧暗文を施す。外面はa1手法を施す。碗X（2）は口縁部が直立し、内外面に丁寧なヨコナデを施す。精良な胎土で赤褐色の色調を呈する。甕A（3）は口縁端部をわずかに肥厚する。口径は32.4cmに復元できる。須恵器杯B（4）は底部にロクロナデ調整を施す。5～8はSK10947出土。須恵器壺A蓋（5）は平坦な頂部に径3cmのつまみを貼り付ける。杯B（6）は底部中央が厚く、低平な高台よりも下方に突出する。甕B（7）は外面に平行叩きを施した後、カキメを施す。底部外面の剥離が顕著であり、底部から3.5cmの高さを境に水平方向の剥離がみられる。土師器

甕A（8）は口縁端部を上方に肥厚する。口径は23.7cmに復元できる。小型の須恵器平瓶（9）はSK10950出土。体部が扁平で、肩部に稜をなす。10・11はSK10946出土。須恵器碗A（10）は丸みをもつ底部の中央が小さな平底を呈する。口縁部が外反気味に立ち上がる。内外面に火樺が顕著にみられる。壺A（11）は肩部が張らない形態を呈する。口縁端部を丸くおさめる。（小田裕樹）

5 まとめ

本調査では、奈良時代の複数の土器廃棄土坑を検出した。また、平瓶が正位状態で置かれた地鎮の可能性のある小土坑も確認した。周辺の調査では顕著な遺構は確認しておらず、これらの遺構の位置づけは現状では困難であるが、近年坪内での調査事例が増加しており、今後も古代における当該地の土地利用について注視しておく必要がある。（芝）